

いう人命を預かる立場から、近隣の親しい医師と医学上の情報交換を盛んに行っていた。新しい医学上の情報を入手すると、直ちに鎖国の藩医に伝えられ、遠隔の藩に迅速に伝播していつて医学の恩恵は広く庶民にまで光が当てられるようになった。

これに加え、徳川幕府の要路は、早くから医学の導入に積極的であり、貿易独占の謝礼に江戸に参府するオランダ商館長に対し、最新の医療器具や医書の献上を要請すると共に、医師の同行を条件づけた。

オランダ商館長一行の長崎から江戸までの長い旅の途次、各地の医師は競って宿舎を訪ねて新しい医術の受容につとめた。この史実は、幕府や官医にもたらした情報よりもはるかに多くの「医学伝播の道のり」の役割を果たしてきた。

一方、オランダ商館長一行も日本の事情を詳細に調査して本国に情報を送り、これに基づき日本が要望する最新医学情報を日本にもたらす成果をあげた。

従って、江戸時代の「鎖国令」という法令は全く存在せず、キリシタン禁制と日本人の出入国を禁止と、各藩が勝手に各国と交易しては幕藩体制に大きな支障となる芽を刈り取った政策は当然の措置であった。このことは、元禄時代に来日したケンペルが帰国後に書いた論文に日本の「鎖国論」として発表したが、これが幕末近くになって志筑忠雄によって翻訳されたもので、時代が明治と替わり、新政府に迎合する歴史学者が「鎖国」の用語を「開国」の用語との対応語として生

れたものであった。

北は松前、東は朝鮮半島、南は唐、清の渡来船、出島からの西欧文明が受容され、周辺諸国との交流があった史実が、江戸時代の日本に鎖国は無かったことを如実に物語るものであるといえよう。

(平成五年九月例会)

三浦梅園の生理学体系

——とくに臓腑・経脈・筋骨の機能について——

近藤 均

生理学に限らず、一般に三浦梅園（一七三三〜八九年）の学問的探究の方法は、主著『玄語』から知られるように、二分割の繰り返しによって事象を分析することであった。二分割のさいに基本モデルとされたのは天と地であり、天地のイメージから派生する上下・精粗・軽重などの観点から、さまざまな事象が二分された。この方法を応用して人間存在のトータルな把握をめざした、その一応の成果が、『玄語』所収の「混糲気体」（『混気＋混体＋糲気＋糲体』の体系である。「気」とは形のないもの、「体」とは形のあるものと理解すればよい。「混気」「混体」とは、個々の人間に遍在している気・体、「糲気」「糲体」とは、偏在している気・体のことである。これら四者が統合されているのが人間であり、その生理的活動の主体は、糲体に属する内外の「臓腑」である。

梅園にあつては、「臟」は肉の、「腑」は皮の別名である。「内臟」(心肺肝腎)が内部の肉であるのに対し、それが外部にせり出したものが「外臟」(耳目鼻舌)である。「外腑」(手足陰乳)が外部の皮であるのに対し、それが内部にめり込んだものが「内腑」(咽胃腸脬)である。

そして、これら内外臟腑を有機的に相互連関させているのが「資給経脈」(「資経+資脈+給経+給脈」と「筋骨」であり、それらの機能については「贅語」「身生軼」の最終稿本(未定)に詳述されている。

梅園のいう「経」には、吸気に由来し人体を衛護する「氣」が流れ、「脈」には、飲食物に由来し人体を營養する「液」が流れる。資経・資脈は心臓がその氣・液を摂取する管、給経・給脈は心臓がそれらを他の部位に供給する管である。主要ルートを辿ってみよう。資脈は、肝臓→門脈の一部→胃静脈→食道静脈→奇静脈→冠状静脈洞→心臓(右室)。給脈は、心臓(右室)→上大静脈・下大静脈→ほぼ全身。資経は、肺→ほぼ全身(肺から氣が漏出)→末端の動脈→下行大動脈→大動脈弓→上行大動脈→心臓(左室)。給経は、心臓(左室)→総頸動脈など→外臟(耳目鼻舌)。

「筋骨」は、両者共同して外臟・外腑の運動と知覚とをつかさどる。「筋」はいわゆる筋肉ではなく、おもに運動神経・知覚神経のことで、脳に由来して「筋」を伝わる一種のパワーが「筋力」である。また、骨の「髓」を伝わるエネルギーのようなものが「骨精」であり、それは、骨の内在しない外臟

(耳目鼻舌)へは、前述の給経を通じて伝わるとされる。

梅園のこれらの見解は、科学的とみるよりは形而上学的と評価するほうが適切である。自ら動物解剖を繰り返し、当代屈指の解剖学者麻田剛立と親交もあり、『解体新書』など蘭学の最新動向への目配りも怠らなかつた梅園であつたが、生理学的な考察を進めるうちに、ついに、このような荒唐無稽な理論に辿りついてしまった。その最大の原因は、梅園が前述の二分法の原則に固執し過ぎたことにある。

一八世紀における漢蘭双方の医学史の脈絡を十分考慮しつつ、今後さらに、「身生軼」の最終稿本から遡つて、梅園旧宅に保存されている膨大な医学関係自筆稿本類を丹念に解読していくならば、梅園が前述のような袋小路に陥つてしまった原因が、具体的に検証できるであろう。そして、そのことによつて、梅園の、医史的にいっそう厳密な客観的評価も可能となろう。それが筆者の目下の研究課題である。

(平成五年十月例会)

J・B・シッドールの衛生指導

中 西 淳 朗

慶応四年(一八六八)春に來日した英医ジョセフ・パウアー・シッドールによる衛生指導について、中須賀哲朗訳の「日本陸軍病院に関する報告書」(註一)、「横浜病院の日記」(註二)、